戦後のラグビーの変遷

――ルールの改正と得点の推移について――

荒井 鉄男・渡辺 由陽

一 序

昨秋（昭和四十八年）、日本のラグビーは英仏遠征を行なった。近年、殊に昭和四十年代になってからは、とみに発展し、「アジア・ラグビー選手権大会」[1]には三連覇を成し、また一流国との交流試合にも善戦をするようになり[2]、世界のラグビーに仲間入りをめざす日本のラグビーであったが、遠征の結果は惨敗を帰して[3]、世界の中にあってはまだまだという厚い壁を見せつけられたのが現状であった。

その壁の向うの、遙か前を行く英国ですら、「英本国ラグビーの現状は、明かに憂慮すべき状態と言うことが出来る[4]」と、近年の低調を嘆いて、その対策の理論と実践に考究しているのであるから、世界のラグビーに近づくには如何ばかりかの感をおもうのである。「英国に勝つには百年かかるよ。いや百年かかっても勝てないよ。」

と云々されるのも、強ち冗談とは言えないのである。

さて、そうは言うものの、日本のラグビーも戦後徐々に前進、発展してきたものである。その間には、何回もの外国との交流試合[5]も行ない、彼らの「突破・継続・深攻の積極ラグビー」[6]を見せつけられ、それの実現をめざして前進してきているのである。また、国際ルールの変遷とともに、国内ルールも度々改正（改変）を行なって今日に至っている。ルールの改正においてもそのねらいとするところは、オープンプレイの積極的なものに改める主旨でなされてきたのである。[6] つまりは、ラグビーの本質に、より迫ろうとすること、即ち一九七〇年の国際競技規則にある、「ラグビー・フットボール競技の目的は――略――、ボールを持って走り、パスまたはキックして、できるかぎり得点をあげることである。」ということの下に、ゲームをやる側も、見る側にも、特に見るのにおもしろいラグビーである、という本質に迫ろうとするものであった。であるからラグビーの発展とは、おもしろいラグビーになってきているか、あるいは得点が多くなってきているかとも言い変えることができるのである。勿論お互いのチームが張り合ったうえでの多得点ということである。

そこで本稿では、近年二十年余の我が国のラグビーの歩みを、主に得点の推移から、いかに経てきたかを眺めるとともに、ルールが変れば戦法やゲームの運び・流れが変わるのは当然であり、ひいては得点の上に最もよく現われるのではなかろうかと、度々のルールの改正が得点にどのように及んでいるのかをみてみたのである。

本稿ではいささか得点の推移解明に重点が置かれてしまったが、あくまで、ラグビーの本来あるべき姿というものを追究する、一アングルとして捉えたことを断って置く。

(1) 昭和四十三年、アジア・ラグビー協会が設立され、第一回東京（四十四年三月）、第二回バンコック（四十五年一月）、第三回香港（四十七年十一月）で行なわれている。

尚、今秋十一月、スリランカでの第四回大会にも快勝した。

(2) 昭和四十四年春、ニュージーランド遠征でようやくオールブラックス・ジュニアを、（23—19）で破り、四十六年には本家全イングランドを迎えて、全早大が（4—56）、全日本が（19—27）、（3—6）と三戦三敗は帰したものの、第三戦では全英をノー、トライに押えて、敵監督をして「国際的水準に近い……云々」と言わせしめた。

大西鉄之祐著　ラグビー（スポーツ作戦講座3）　二三六頁参照

(3) 英国で一勝六敗

グラモーガン　東部選抜　23—11　全日本

モンモスシャ　—選抜　26—16　全日本

グラモーガン　西部　16—6　全日本

全日本　12—9　ウェールズ西部選抜

全ウェールズ　62—14　全日本

ミッドランド　選抜　10—6　全日本

全イングランド19—10　全日本

戦後のラグビーの変遷

戦後のラグビーの変遷
フランスで一勝三敗
プロバンス　選抜　51—19　全日本
ルション選抜　29—18　全日本
全日本　19—8　リムーガン選抜
全フランス　30—18　全日本

(4) A Guide for Coaches. Japan Rugby Football Union（英国ユニオン指導書翻訳）昭和四十七年 Basic Coaching の第1頁

(5) 大西鉄之祐著　ラグビー（旺文社）昭和四十八年版　一九九～二〇三頁参照

(6) 大修館書店　スポーツの技術史　昭和四十七年　五三五頁

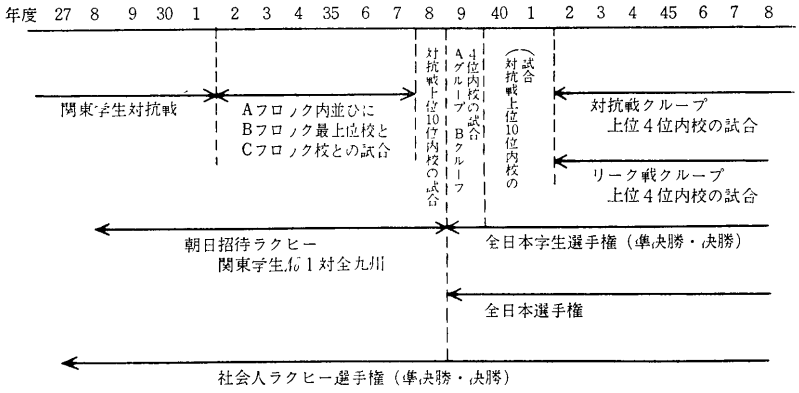
二　得点の推移について

I　集計方法

得点推移についての調査は、毎日・朝日両新聞の、昭和二十七年から四十九年の縮刷版をもとに、各年度のゲームのスコアーを集計した。ルールの改正等の観点からは、二十五年位からのスコアーが欲しかったのであるが、該当の縮刷版並びに文献が身近に無かったので、二十七年度からに止まった。

尚、スコアーはほとんど毎日新聞の方を利用したのであるが、一部不明な箇所や、簡略なスコアー（得点のみのスコアーなど）については、朝日新聞の方と照合して補った。

別表Ⅰ　集計対象の試合



集計の仕方は次の様に限定して行なった。

一、各年度は、九月から次年の一月の試合迄とした。

一、集計対象の試合は、**別表**Ⅰに示した通りである。尚、その他に全早大、全明大、全慶大、全法大の各対抗戦と、明治大対八幡製鉄の定期戦、全日本対全日本候補、の各試合も加えた。

一、関東大学ラグビー戦を中心に集計したのであるが、各年度（特に大学選手は毎年あるいは二、三年毎に異質であるから）、各対戦相手によって得点の幅がかなり大きいので、各年度なるべく等しい条件を保つ意味で、各年度とも上位校同士の対戦試合を集計対象とした。

尚、別に、毎年一月に行なわれている、全国高等学校選手権大会の、第二回戦から決勝迄の十五試合も集計してみた。

これらの集計は各年度次の様に整理した。

(a) 総得点より一試合の平均得点

(b) 前半及び後半に於ける一試合の平均得点

(c) 勝チーム及び負チームの一試合の平均得点

(d) 得失点差の一試合の平均値

負チーム平均得点		得点比率(%)		得失点差平均		前半得失点差平均		後半得失点差平均	
$\overline{X}$	S.D	勝チーム	負チーム	$\overline{X}$	S.D	$\overline{X}$	S.D	$\overline{X}$	S.D
□12.8	±6.3	71.5	28.5	□19.4	±13.9	□10.1	±8.9	□12.8	± 9.2
13.0	±7.7	67.3	32.7	13.8	± 8.9	7.8	±5.1	8.7	± 6.8
14.0	±8.2	68.0	32.0	15.9	±12.0	7.1	±5.9	13.2	±10.0
10.4	±5.3	74.4	25.6	19.9	±17.0	8.8	±6.4	13.3	±12.4
10.8	±5.3	74.8	25.2	21.1	±16.1	10.9	±9.2	11.1	± 9.6
9.9	±5.0	71.6	28.4	15.0	±13.1	9.2	±7.9	10.3	± 7.0
○ 9.0	±4.9	76.5	23.5	20.4	±14.0	11.2	±7.7	11.6	± 7.8
○ 9.3	±6.3	74.4	25.6	15.5	±12.8	8.1	±6.1	11.6	± 8.0
○ 8.7	±5.3	69.9	30.1	○12.1	± 8.7	7.2	±6.3	○ 7.8	± 6.6
○ 9.1	±5.2	68.9	31.1	◎11.1	± 9.7	7.1	±5.9	◎ 7.1	± 5.4
◎ 7.9	±4.7	72.1	27.9	○12.6	± 9.3	7.0	±5.6	○ 6.9	± 6.4
◎ 7.1	±5.2	72.3	27.7	◎11.1	± 7.6	○ 6.3	±4.9	○ 7.9	± 5.2
◎ 6.7	±3.7	75.4	24.6	13.8	± 9.1	◎ 4.9	±4.1	11.7	± 7.5
◎ 6.5	±4.8	70.7	29.3	◎ 9.2	± 8.1	○ 5.2	±5.5	◎ 6.2	± 5.3
◎ 6.5	±4.2	76.1	23.9	14.3	± 8.8	7.7	±6.8	8.6	± 5.4
◎ 5.5	±4.5	77.8	22.2	13.7	±10.0	7.3	±7.0	8.7	± 7.6
◎ 5.3	±4.2	72.6	27.4	◎8.8	± 5.51	◎ 3.5	±3.2	○ 8.0	± 4.9
◎ 7.2	±5.2	74.2	25.8	3.2	± 9.1	7.6	±4.7	○ 7.4	± 5.9
◎ 5.8	±4.2	73.4	26.6	◎10.2	± 8.8	○ 5.8	±4.9	○ 8.1	± 6.2
◎ 5.8	±4.4	81.5	18.5	19.7	±14.2	8.4	±7.7	13.3	± 8.7
◎ 6.3	±4.7	79.4	20.6	18.0	±10.7	9.7	±5.4	10.8	± 7.2
◎ 6.1	±3.6	83.8	16.2	25.3	±18.8	12.0	±9.1	14.3	±10.5

表1　　○P<0.05 ◎P<0.01 □印の年度と比較して

年度	試合数	一試合平均得点	前半平均得点	後半平均得点	勝チーム平均得点
	n	$\overline{X}$ S.D	$\overline{X}$ S.D	$\overline{X}$ S.D	$\overline{X}$ S.D
48	29	○45.1±17.2	□20.2± 9.4	24.9±10.5	32.2±14.2
47	27	39.9±14.1	19.6± 9.3	20.3± 8.3	26.9± 8.2
46	27	43.9±17.1	17.9± 8.1	26.0±12.4	29.8±12.3
45	27	40.7±18.4	17.8± 9.5	22.9±11.5	32.1±16.9
44	27	42.6±17.0	19.4± 8.0	23.2±11.3	31.9±15.7
43	27	34.8±13.1	○15.3± 7.2	19.4± 9.1	24.9±12.1
42	27	38.4±13.5	17.1± 7.6	21.3± 8.6	29.4±13.3
41	31	□36.4±13.5	○14.6± 6.7	□21.7± 9.2	□27.1±11.5
40	33	○28.8±11.9	◎13.7± 7.9	◎15.1± 7.5	◎20.1± 8.9
39	30	○29.4± 8.9	○15.3± 7.8	◎14.1± 6.6	◎20.3± 7.7
38	28	○28.4±13.1	◎13.5± 6.3	○14.9± 9.9	○20.5±10.3
37	30	◎25.6±10.8	◎10.5± 6.5	◎15.1± 7.1	◎18.5± 7.8
36	30	◎27.1±10.0	◎10.9± 5.0	○16.2± 7.3	○20.5± 9.9
35	26	◎22.2± 9.1	◎ 9.8± 6.4	◎12.3± 5.4	◎15.7± 7.2
34	24	○27.3±12.3	◎12.4± 6.7	◎14.8± 7.4	○20.8± 9.9
33	23	◎24.7±11.9	◎11.7± 7.1	◎13.0± 8.2	○19.2±10.0
32	24	◎19.3± 8.9	◎ 7.9± 5.7	◎11.5± 5.3	◎14.0± 6.1
31	25	○27.4±11.3	◎13.2± 7.2	◎14.1± 6.4	○20.2± 8.8
30	27	◎21.7± 9.8	◎ 9.1± 5.7	◎12.7± 6.4	◎16.0± 8.3
29	25	31.3±11.9	◎12.3± 6.4	19.0± 8.0	25.5±12.1
28	26	30.7±10.8	◎12.1± 4.6	18.6± 7.5	24.4± 9.6
27	24	37.5±18.1	16.3±10.0	21.3± 9.2	31.4±18.1

表 2　全国高等学校大会　　○P<0.05 ◎P<0.01 □印の年度と比較して

年度	一試合平均 $\overline{X}$	一試合平均 S.D	前半 $\overline{X}$	前半 S.D	後半 $\overline{X}$	後半 S.D	前半—後半	勝チーム $\overline{X}$	勝チーム S.D	負チーム $\overline{X}$	負チーム S.D
47	32.5	±20.7	14.3	±9.7	18.3	±13.1		25.6	±13.7	6.9	±5.2
46	□27.2	±16.6	6.8	±6.6	□17.4	±11.8	○	□20.2	± 8.3	□7.0	±5.2
45	23.2	±15.3	10.5	±7.4	12.7	± 7.6		17.9	± 8.5	5.3	±4.5
44	21.4	±13.0	8.4	±5.7	13.0	± 9.1		15.6	± 6.3	5.8	±4.5
43	25.2	±16.7	11.7	±7.6	13.5	± 9.8		19.5	± 9.9	5.7	±4.4
42	21.5	±12.4	□11.1	±6.9	10.5	± 6.5		15.7	± 4.4	5.9	±3.1
41	○15.5	± 9.2	○ 5.6	±3.4	○ 9.9	± 6.4	○	◎10.5	± 5.0	4.9	±2.4
40	16.5	±10.5	8.6	±5.7	○ 7.9	± 5.9		○12.7	± 6.3	3.9	±2.5
39	○14.0	± 9.2	○ 6.0	±4.7	○ 8.0	± 5.4		◎11.2	± 5.4	◎2.8	±2.6
38	○15.8	±12.3	6.6	±5.4	○ 9.2	± 7.8		14.1	± 9.7	◎1.7	±2.4
37	16.6	±11.6	8.7	±6.8	○ 7.9	± 6.7		○13.9	± 7.7	◎2.7	±2.9
36	○14.9	±10.6	6.7	±6.0	○ 8.2	± 5.8		○12.7	± 7.5	◎2.3	±1.7
35	○16.0	±11.2	6.7	±5.1	○ 9.3	± 6.7		14.4	± 5.3	◎1.6	±1.9
34	○13.2	± 9.2	6.7	±5.7	◎ 6.3	± 4.8		◎11.5	± 5.4	◎1.7	±1.9
33	○14.9	±11.4	○ 5.9	±5.0	○ 8.9	± 7.3		○13.3	± 8.6	◎1.6	±2.7
32	◎10.9	± 7.8	◎ 3.8	±3.8	◎ 7.1	± 5.0		◎ 9.0	± 5.6	◎1.9	±1.7
31	○15.0	± 9.6	6.3	±4.4	○ 8.7	± 6.4		◎11.3	± 6.0	○3.7	±2.8
30	21.4	±16.3	8.7	±7.1	12.7	±10.0		20.0	±11.3	◎1.4	±1.9
29	18.1	±12.2	9.3	±6.8	○ 8.8	± 6.3		14.7	± 7.6	○3.3	±3.2
28	◎10.5	± 7.7	○ 4.7	±4.1	◎ 5.8	± 4.4		◎ 9.2	± 5.4	◎1.3	±2.0
27	○16.0	±11.0	7.5	±5.4	○ 8.5	± 6.9		○12.9	± 7.7	○3.1	±2.8

(e) 前半及び後半に於ける得失点差の一試合の平均値

(f) トライ数、ゴール数、反則数、ペナルティ・ゴール数について

以上(a)、(b)、(c)、(d)、(e)の結果は**表1**、**表2**（高校大会）の通りである。(f)の結果は**表3**と**表4**の通りである。

Ⅱ 結果

(a) 一試合平均得点の推移

図1、**図2**は一試合当り、勝・負両チームが合計どの位の得点したかを示したものである。

図1では顕著な傾向として、先ず、昭和二十九年度以前、三十年度から四十年度、それから四十一年度以降、と大きく三つに分けられるということである。四十一年度と他年度との得点の比較において、三十年度から四十

図1 一試合平均得点

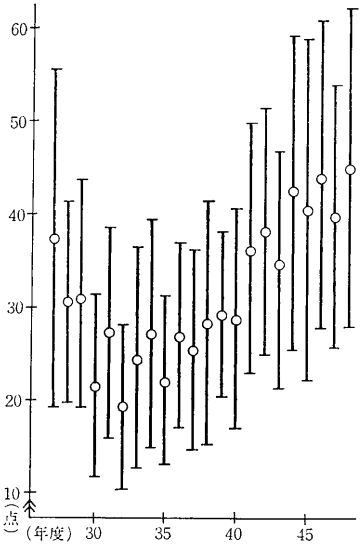
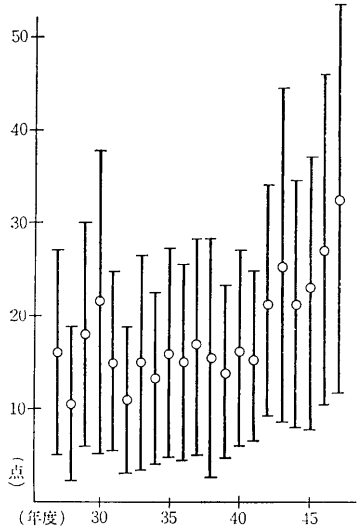


図2 一試合平均得点（高校大会）



イ	ゴール		ゴール成功率(%)	
負チーム	勝チーム	負チーム		
$\overline{X}$ S.D	$\overline{X}$ S.D	$\overline{X}$ S.D	勝チーム	負チーム
□ 1.9±1.4	□ 2.8±2.2	□ 1.9±1.4	54.4	50.9
1.9±1.5	2.4±1.5	1.9±1.5	54.2	50.0
2.3±1.7	2.6±1.8	2.3±1.7	50.0	44.4
2.4±1.4	3.7±2.8	2.4±1.4	53.5	36.9
2.3±1.2	3.8±3.0	2.3±1.2	53.1	42.9
2.3±1.4	2.9±2.1	2.3±1.4	51.7	39.7
1.7±1.3	3.5±2.0	1.7±1.3	52.8	57.8
2.0±1.5	3.3±2.3	2.0±1.5	52.6	42.9
1.8±1.3	2.3±1.5	1.8±1.3	48.7	49.2
1.7±1.3	2.1±1.4	1.7±1.3	46.7	39.2
1.7±1.0	2.6±1.7	1.7±1.0	53.2	42.6
1.5±1.1	2.0±1.3	1.5±1.1	50.4	39.5
1.3±1.1	2.1±1.5	1.3±1.1	44.4	25.0
1.4±1.3	○ 1.5±1.0	1.4±1.3	44.4	19.4
1.4±1.1	2.4±1.6	1.4±1.1	58.2	36.4
○ 1.0±1.2	2.3±1.7	○ 1.0±1.2	53.9	31.8
○ 1.1±0.9	◎ 1.3±1.1	○ 1.1±0.9	45.7	18.5
1.4±1.2	1.8±1.5	1.4±1.2	40.4	42.9
○ 1.1±1.0	○ 1.5±1.1	○ 1.1±1.0	40.2	63.0
○ 1.2±1.0	2.7±2.1	○ 1.2±1.0	44.7	41.9
1.4±1.1	2.2±1.7	1.4±1.1	37.4	33.3
1.5±0.9	3.7±2.9	1.5±0.9	50.9	26.5

表3　○P<0.05 ◎P<0.01 □印の年度と比較して

年度	トライ数	ゴール数	ゴール成功率	トライ勝チーム
	$\overline{X}$ S.D	$\overline{X}$ S.D	(%)	$\overline{X}$ S.D
48	□ 7.0±3.8	□ 3.8±2.3	53.4	□ 5.1±3.2
47	6.4±2.8	3.4±2.0	52.9	4.4±1.9
46	7.6±3.1	3.7±2.6	48.3	5.3±2.5
45	9.3±4.8	4.6±3.3	49.2	6.9±4.4
44	○ 9.5±4.0	4.8±3.3	50.5	◎ 7.2±3.2
43	7.9±3.1	3.8±2.4	48.1	5.6±2.8
42	8.3±3.5	4.4±2.0	53.8	6.6±3.4
41	8.2±3.2	4.1±2.6	50.2	6.2±2.8
40	6.5±2.8	3.2±2.0	48.8	4.7±2.2
39	6.3±2.3	2.8±1.8	44.7	4.6±2.2
38	6.6±2.8	3.4±2.2	50.5	5.0±2.3
37	5.5±2.8	○ 2.6±1.4	47.5	4.0±2.0
36	6.1±2.5	○ 2.5±1.4	40.2	4.8±3.4
35	◎ 4.8±2.2	◎ 1.8±1.1	37.3	○ 3.5±1.6
34	5.5±3.0	2.9±1.9	52.7	4.1±2.4
33	5.3±2.6	○ 2.6±1.8	49.5	4.2±2.2
32	◎ 4.0±1.8	◎ 1.5±1.2	38.1	◎ 2.9±1.5
31	6.0±2.8	○ 2.4±1.8	40.9	4.6±2.4
30	○ 5.0±2.5	○ 2.3±1.5	45.4	3.8±2.0
29	7.2±2.9	3.2±2.2	44.2	6.0±3.0
28	7.3±2.8	2.7±1.9	36.6	6.0±2.4
27	8.7±4.6	4.0±2.9	46.7	7.2±4.5

負チーム反則数	勝チームP.G数／負チーム反則数	負チームP.G数	勝チーム反則数	負チームP.G数／勝チーム反則数
$\overline{X}$ S.D	(%)	$\overline{X}$ S.D	$\overline{X}$ S.D	(%)
◎12.3±4.4	16.3	◎ 1.1±1.1	◎14.6±5.0	7.5
◎12.6±3.8	12.7	◎ 1.2±1.0	◎13.1±4.2	9.2
◎11.9±4.3	9.2	3.8±1.0	◎12.3±4.5	6.5
□ 8.6±3.9	10.5	□ 0.4±0.6	□ 9.1±3.8	4.4
8.1±3.5	11.1	0.6±0.8	8.7±3.5	6.9
9.9±4.5	7.1	0.4±0.6	9.1±3.9	4.4
7.7±4.0	11.7	0.7±0.9	9.9±2.7	7.1
8.2±3.7	7.3	0.5±0.7	8.0±2.6	6.3
9.1±3.8	7.7	0.5±0.7	9.2±3.9	5.4
8.3±4.4	10.8	0.6±0.8	9.7±3.4	6.2
7.5±3.8	6.7	0.4±0.7	7.3±4.0	5.5
8.7±3.6	4.6	0.3±0.5	8.6±3.1	3.5
8.8±3.9	6.8	0.7±0.9	8.0±3.6	8.8
9.9±4.7	8.1	0.6±0.7	9.7±3.7	6.2
◎11.2±4.8	10.7	0.4±0.6	9.7±3.6	4.1
7.6±4.3	10.5	0.5±0.7	9.6±3.3	5.2
10.2±4.2	7.8	0.5±0.7	10.2±4.0	4.9
8.0±2.8	11.3	0.5±0.8	8.7±3.5	5.7
7.3±3.6	6.8	0.4±0.6	7.6±2.7	5.3
○ 5.5±3.3	10.9	0.3±0.6	◎ 5.0±1.8	6.0
○ 5.7±2.8	12.3	0.3±0.6	◎ 5.6±2.5	5.4
6.6±4.4	12.1	0.2±0.5	◎ 5.1±3.2	3.9

表4　○P<0.05 ◎P<0.01 □印の年度と比較して

年度	反則数 $\bar{X}$ S.D	P.G数 $\bar{X}$ S.D	P.G/反則 (%)	勝チームP.G数 $\bar{X}$ S.D
48	◎26.8±7.9	◎ 3.1±2.2	11.6	◎ 2.0±1.4
47	◎25.7±5.5	◎ 2.8±1.7	10.9	○ 1.6±1.3
46	◎24.2±5.9	1.9±1.9	7.9	1.1±1.2
45	□17.8±5.1	□ 1.3±1.3	7.3	□ 0.9±1.0
44	16.8±5.6	1.5±1.4	8.9	0.9±0.9
43	19.0±7.0	1.1±1.0	5.8	0.7±0.7
42	17.6±6.7	1.6±1.3	9.1	0.9±0.9
41	16.2±5.4	1.1±1.4	6.8	0.6±0.8
40	18.3±5.6	1.2±1.1	6.6	0.7±0.6
39	18.1±5.4	1.5±1.3	8.3	0.9±0.9
38	14.9±6.4	0.9±1.0	6.0	0.5±0.6
37	17.3±4.8	0.8±0.8	4.6	○ 0.4±0.6
36	16.8±5.2	1.2±1.0	7.1	0.6±0.7
35	19.6±5.8	1.3±1.1	6.6	0.8±0.8
34	20.8±6.1	1.6±1.1	7.7	1.2±1.1
33	18.3±4.9	1.3±0.9	7.1	0.8±0.7
32	20.3±5.4	1.3±1.3	6.4	0.8±1.0
31	16.7±4.4	1.4±1.4	8.4	0.9±0.8
30	○14.9±4.4	0.9±0.9	6.0	0.5±0.7
29	◎10.4±3.7	0.9±0.8	8.7	0.6±0.7
28	◎11.3±4.4	1.0±0.8	8.8	0.7±0.7
27	◎11.7±6.9	1.0±1.4	8.5	0.8±1.2

年度の値は全て五%乃至一%の水準で有意であるが、その他の年度は有意ではない。即ち、三十年度から四十年度迄の得点は、その前後の年度より低い値を示している。平均にして5〜6点から10〜15点差位、最高に得点した試合の場合でも、四十一年度以降の平均得点と同じ位である。

二十九年度以前においては、図では下降気味であるが、それ以前の資料がないため不明である。ただかなり高い得点と大きな標準偏差であったろうと推察され、三十年度以降とは別の意味を有するであろう。

四十一年度以降においては、更に二つの段階に分けられる。四十一年度は得点の大きな変換期であるが、四十一〜四十三年度も全般的にみて、一つの変換期であると言える。

図2は高校大会の結果であるが、高校レベルでも、ほぼ同様な意味を有するような傾向を示すが、図1の場合と変化の時期が一、二年あとにずれており、四十六・四十七年度との比較においてのみ、三十一年度から四十一年度は有意であり、四十二年度以降全般に渡っては有意ではない、ということがそれを示している。

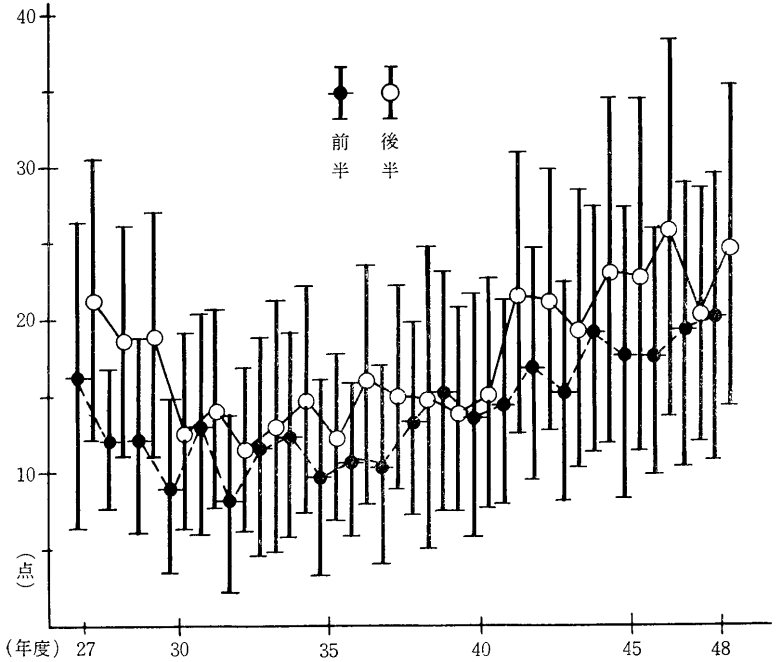
三十年度以前については判然としないが、三十年度の高得点というのが顕著である。

(b) 前半及び後半に於ける得点推移

図3、**図4**は前・後半に於ける夫々の得点を示したものである。

前半に於いては、両図ともあまり顕著な傾向は見られないが、三十年代初めにかけて下降気味に入り、その後横這い状態が続き、四十年代初めから上昇していくという傾向が見られる。**図3**では、四十七・四十八年度と比較した場合の四十一年度以前の得点は有意であるが、四十二年度以降は有意差はないから四十二年度からそれ以

図3　前半・後半平均得点

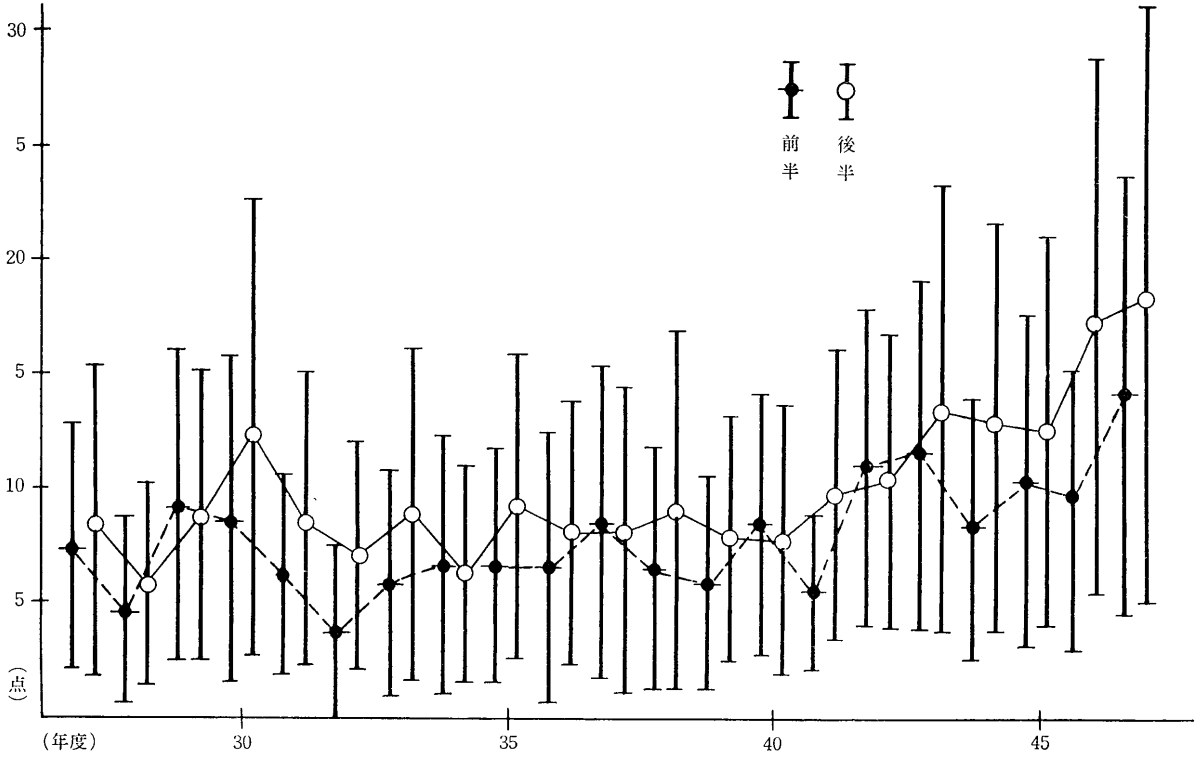


前とは別の段階になっているのではなかろうか。高校レベルに於いても同様である。

後半では、前半であまり判然としなかった傾向が、期をほぼ一にして、極めて顕著に見られる。即ち、図1では二十九年度以前と四十一年度以降の得点のしかたが大きく、その間三十年度から四十年度の得点は小さく横這である—四十一年度と他年度との比較で、三十年度から四十年度はほとんどが1%水準で有意であるのが顕著である。

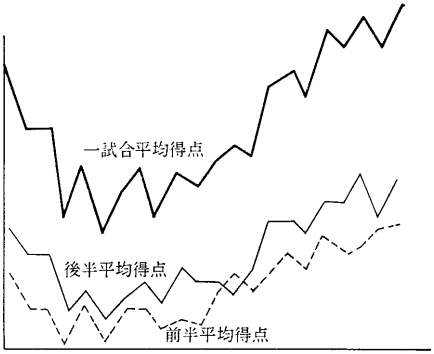
図4でも同様であるが、四十六年度と他年度との比較において、四十一年度以前が有意差のあることを示すから、高得点になる時期がずれて、四十三年度頃からであろう。はっきりと示すのは四十六年度からである。

図4　高等学校大会の前半・後半の平均得点



斯して、三十年代と四十年代では、前半ではそれ程ではないものの、大きく変化した。そこで前半と後半を比較してみると、先ず、前半の方が後半の得点より小さいことが明らかである。従って後半の方が大きいのであるが、それも前述した三十年代の低迷状態には、あまり前・後半の差は見られなく、二十年代と四十年代に大きな差が見られる。つまりその期の後半得点は前半を大きく上回っており（前・後半各々三十年代と四十年代では、前半で1トライ乃至1ゴール位、後半では3トライ乃至2ゴール位伸びている）、(a)の一試合を通じての得点が大きくなっているのも、後半の高得点によるものと断定される。―**別図1**参照。

別図1



(c) 勝チーム及ぶ負チームの一試合に於ける得点推移

図5、**図6**は勝チームだけ及び負チームだけの総得点より、一試合の平均得点を示したものである。

先ず負チームの方であるが、高校大会レベルも含めて、顕著な傾向は見られない。ただ、四十年度前後に僅かづつ得点が増加しており、三十年代と四十年代では、平均でほぼ1トライに当る位だけの差が出来ている。また、三十年代ではせいぜい得点しても、10点位であったのが、20点以上（三十年代の勝チームの平均得点にあたいする）も得点して負ける試合も、特に四十年代後半に出てきており、今後負チームの方の得点も増加していくのではないかということが予想される。特に高校大会では著しいように思われる。

図5　勝チーム・負チームの一試合平均得点

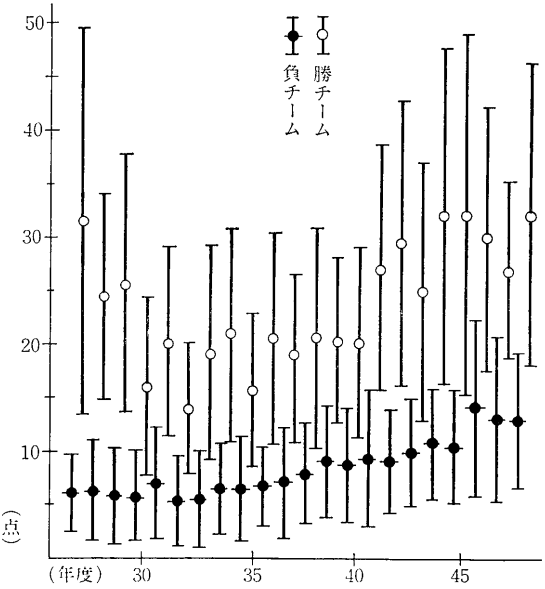
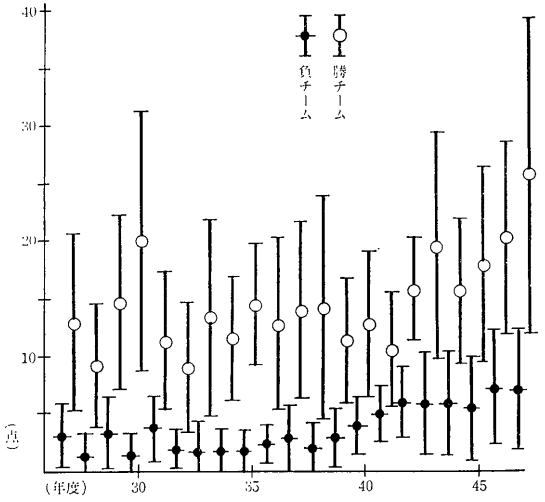


図6　高等学校大会の勝・負チームの一試合平均得点



さて、勝チームの方であるが、(a)、(b)の項で述べられたのと同様の顕著な傾向を示している。つまり、四十年度以前とそれ以降では、全般的に2～3トライあるいは2ゴール位の差が出来ており、また最高得点にあたいするゲームの場合でも、一・五倍から二倍近く迄差が出来ている。従って勝チームの大量得点によるゲーム、というものの増加していることが推察される。そして、それは二十九年度以前、特に二十七年度においても同様と思われる。

高校大会においても、全般的には同様な傾向であるが（四十二年度あるいは四十三年度を界にして）、その差が極めてはっきりしているとは言い難い（四十六年度以降と比較した場合に有意差を示すから）。

従って、勝チームと負チームでは、負チームの1トライの増加に対して、勝チームは3トライ以上も増加しているのであるから、両チームの差はますます大きくなったと言えるが、勝チームの得点の幅が大

図7　前半・後半に於ける得失点差の一試合平均

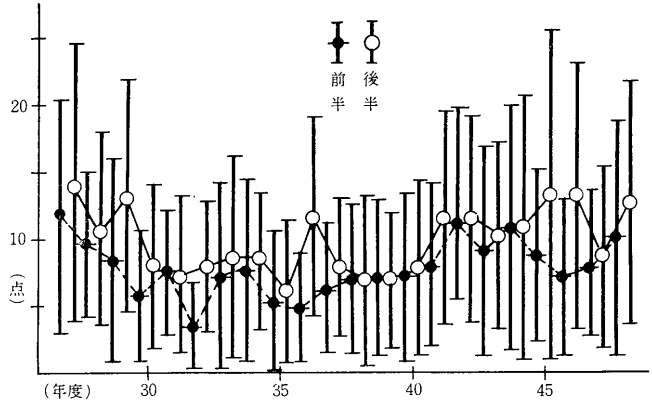
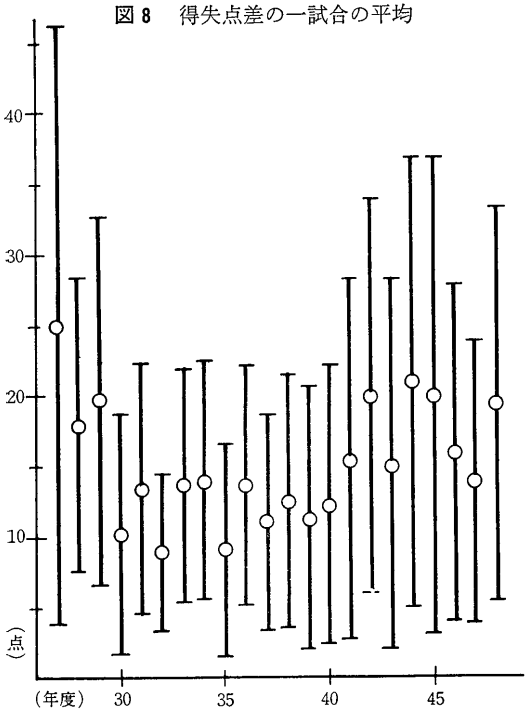


図8　得失点差の一試合の平均



きいことと、負チームの最高得点にあたいする得点が大きくなったということから、勝チームの大量得点によるゲームとハイレベルの接戦のゲームも多くなってきているのではなかろうか。

(d) 得失点差の推移

図7は一試合の前半・後半に於ける得失点差であり、**図8**はそのトータルの得失点差である。

前半・後半をみてみると、ほとんど前半の方が後半より、それ程の差ではないが小さい。これは前半に於いて、接戦あるいは大差がつかなくとも、後半で差がつくと言えるのである。だが、二十九年度、三十二年度、四十五年度、四十六年度等を除けば、一概にそうとは言い切れない。

また前半・後半を通じて、前半に於ける得失点差平均は、極めて低いものもあるが、それを除けば、三十年度から四十年度迄は、その前後の期間と三つに区分されるであろう。即ち、二十九年度迄は得失点差が大きく、また四十一年度からも大きくなっているのに対して、三十年代は得失点差が小さい。しかも、四十八年度との比較に於いて有意差をもつ年度は、後半の方がより多いので、後半に於けるその傾向の方がより顕著であると言える。むしろ前半に於いては、その傾向はほとんどうかがわれないと見られ、もし見られるとすれば、四十四年度以前を対象としたときに限られるであろう。従って、四十五年度以降の前半は接戦であると思われるゲームが多いことがうかがわれ、後半に於いて大差をつけて勝つケースが多いように思われる。

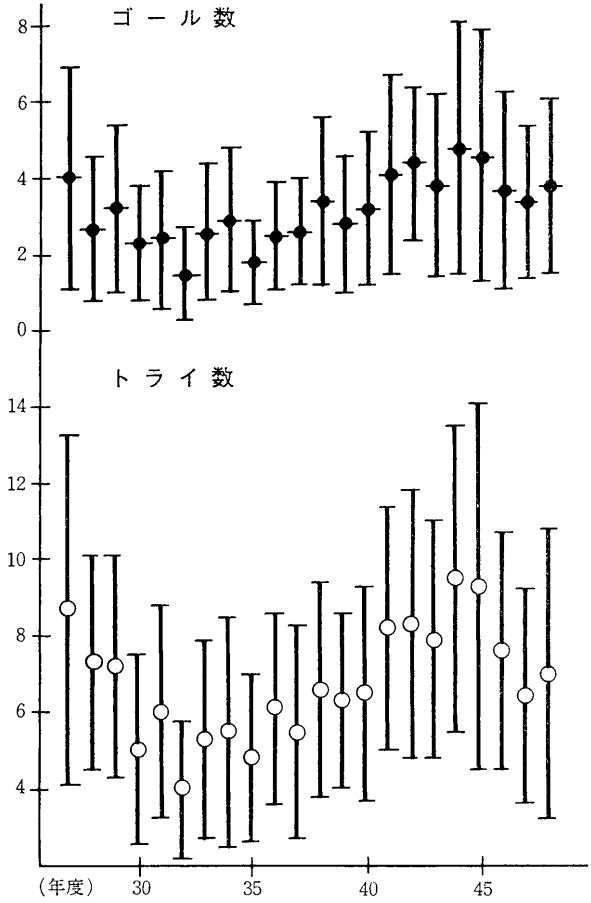
二十九年度以前は、前半・後半に於いても差は大きく、後半の方がより大きいと言える。

一試合を通じての得失点差に於いても、三十年度と、四十一年度を界にしての傾向は顕著で、二十九年度以

前、特に二十七年度の差は極めて大きく、それ以前もそれに類することが推察される。

また、四十年代では四十六・四十七年度が差が小さくなって、接戦のゲームが多かったことを示しているのではなかろうか。

図9



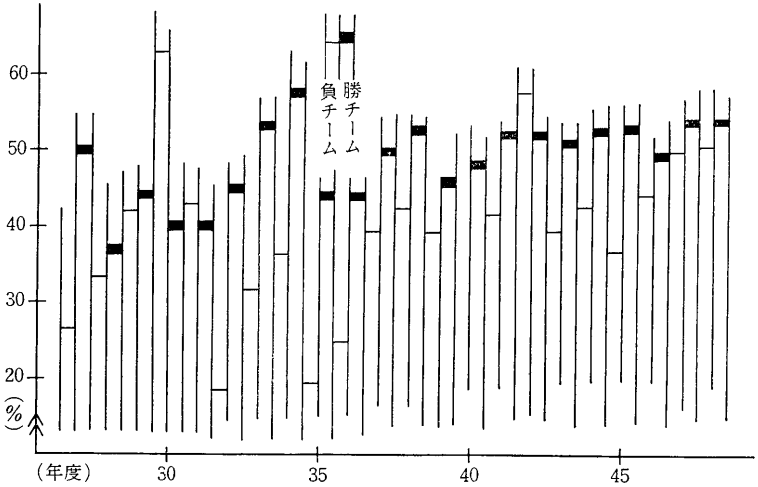
(e) トライとゴールとペナルティ・ゴールについて

(1) トライとゴール

図9はトライ数とゴール数の一試合の平均を表わしたものである。図10はトライに対するゴール・キックがどの位成功したかを示している。

トライ数・ゴール

図10　トライに対するゴールの割合（%）



数に関しては、直接得点と結び着くのであるから、得点の推移と同様の傾向を示すのは当然と言えよう（あるいはトライ数だけで得点している場合、ゴール数で多く得点する場合など考えられるが）。従って、一試合を通じても、勝チームも負チームも、大小の差はあれ、三十年度から四十年度迄は少なく、その前後の期間は多くなっている。そして、トライ数が増すとゴール数も増している。だがその割合は、三十年代から四十年代へのトライ数の増えかたとゴールの増えかたでは、ゴール数の方が僅かに大であると言える。表3のゴール成功率に於いてもそれは示されている。従ってそれは、ラグビーに於けるキック力というものも重要度を増していると言えよう。

図10では勝チームと負チームのそれを表わしているのであるが、ここでも四十一年度以降の勝チームは、毎年度安定して五十%以上の成功率を示している。負チームに於いても、それ以前は極めて不安定な低い成功率であったのが、徐々に安定した高い成功率になりつつある。勿論、これはゴール・キックをし易い位置にトライしたか、あるい

は少ないトライでゴールを同じ数だけ成功すればその率はよくなるのではあるけれども。

勝チームと負チームのゴール・キックの成功率は、二・三の年度を除けば全て勝チームが上回っている。一般的に、ゲームに於いて勝チームが押しているのが当り前であろうから、ゴールを成功し易い位置にトライするのは当然と言えるであろうし、またトライ数に於いても負チームより多く、それだけゴールを狙う機会が多いのであるから、それは当然と言えるであろう。それとともに、キック力の方でも勝チームの方が上であると言える。

最後になってしまったが、ここで最も著しい傾向を示しているのは、四十六年度以降のトライ数とゴール数である。つまり両方とも前年度迄（四十一年度以降の）よりかなり下回っているということである。得点の推移に於いては、その期間の得点は低下していなかったはずである。それは残るところの得点の方法である、ペナルティ・ゴールとの関係で説明されること以外にないであろう。

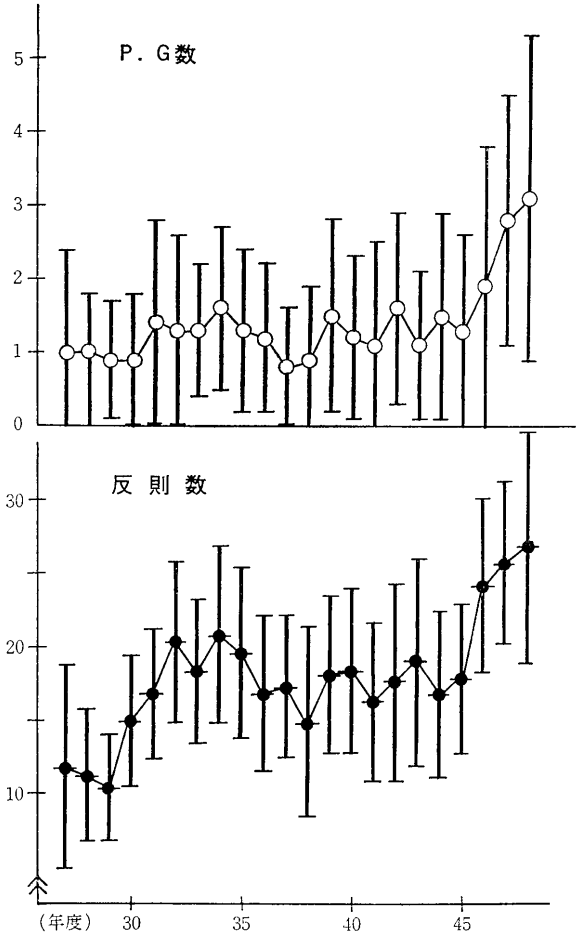
(2) ペナルティ・ゴールと反則

図11では勝・負両チーム合わせての反則数とペナルティ・ゴール数を示し、**図12**では両チームの各々の反則数と、相手チームへの（ペナルティ・ゴールを狙えるのは当然相手チームの反則に対してであるから）反則数に対するペナルティ・ゴール数の割合を示したものである。

反則数では、三十年度から急増して、三十年代前半は高い値を示している。その後、三十年代後半から四十年代前半迄は、やや少なくなるものの、二十年代よりはかなり高い値を示している。そして大きな特徴は、四十六年度から更に大きく増えて、増加し続けているということである。

ペナルティ・ゴール数では、反則数の三十年度から急激な増加に対応して増してはおらず、三十年度から一年

図11

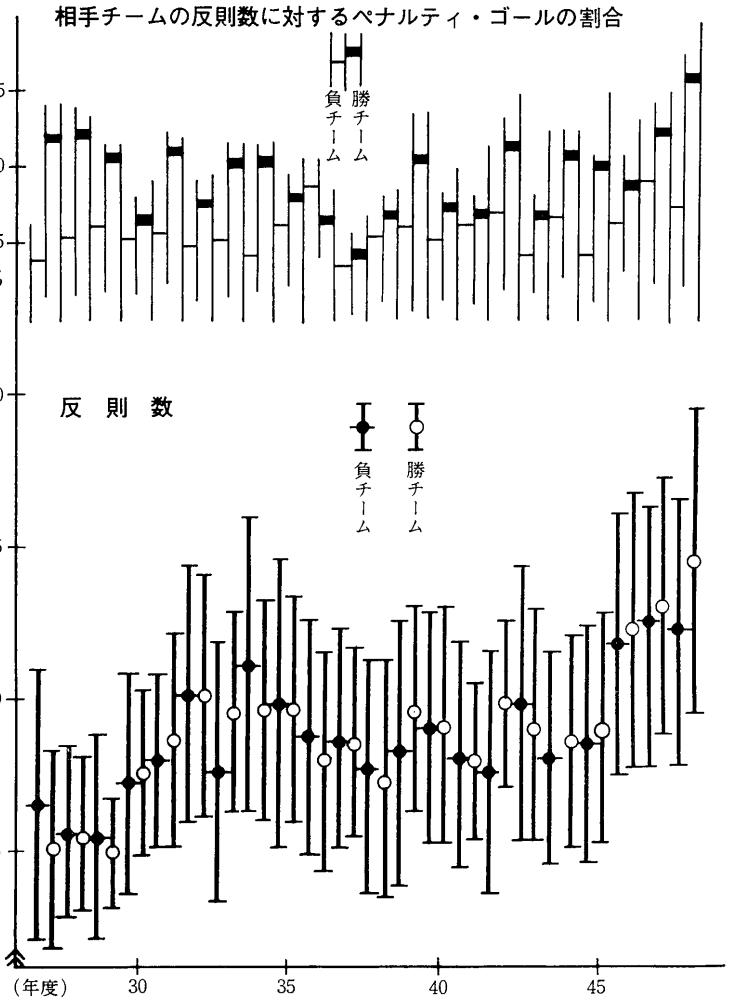


遅れて三十六年度迄やや増えている。しかし、三十七・三十八年度には三十年度よりやや減っており、それを除けば三十年度から四十五年度迄は僅かの増減はあるものの、ほとんど変わりないものと言える。だが四十六年度に大きく反則数が増加しているのに対応して、ペナルティ・ゴール数も大きく増加している。殊に一年、後にずれて四十七年度からは極めて大きい。

従って、前の項で四十六年度以降のトライ数・ゴール数が少ないのに得点が変化ないのは、ペナルティ・ゴールによる得点によって占められていると言える。

勝・負両チームの反則数とペナルティ・ゴール成功率に於いては（成功率と言っても、反則のあった位置によって、

図12　反則とペナルティ・ゴール



べたのと同じような傾向を示し、全般的にはほぼ同じ位の反則をしているが、三十九年度迄は勝チームより負チ

ゴールを狙える場合もあろうし、そうでない場合もあるから一概にその結果を云々は出来ないのではあるが、或る傾向というものは出るであろうということでここでは取り扱う)、先ず反則数は両チームとも前の図11で述

ームの方が上回っているのに対し、四十年度以降は逆に勝チームの方がやや上回っている（個々に取り上げると、勝チームでも極めて反則数の少ないチームも目につくのではあるが）。

それではペナルティ・ゴール成功率をみてみると、先ず勝チームの方がいずれも成功率が高いということである。これは一般的に負チームは押されているから、反則の起る位置も相手にゴールを狙われ易い所で行なっていると言える。次に二十年代では圧倒的に勝チームの方がよく、負チームは低い。三十年代からの四十三年度迄は、勝チームで高い年度が散見されるが、それを除けば両チームとも極めて低い。それに対して、四十六年からは勝チームは年々高くなっている。負チームに於いてもそれまでの最高位と同じ、もしくはやや高い。しかも、四十五年度以前と比べて、反則数に於いてもはるかに大きいのに、ペナルティ・ゴール率も高い（二十年代の勝チームも高いが、反則数が少ない）ということは、ゲームの勝敗に、キックの要素の占める割合が増えるとともに重要性というものが増大してきたのではなかろうか。今後その傾向が更に増えるようにも思われる。

三、ルールの改正について

日本ラグビー・フットボール協会は、毎年「競技規則」を発行している。これは毎年ルールの変更を行なっているということであり、実際そうなのである。

ここで、改正としないで「変更」を用いた。競技規則の中でも「変更部分」などと使っている。そこで本稿なりに、改正というものを規定しておく。

例えば

靴の鋲はいづれも革かゴムで作られ

というのが

靴の鋲はいづれもゴムか又はアルミニウムで

とか、フェヤーキャッチの条で

両足で立って停止した状態のまま**直接**ボールを捕えると同時に……

というのが

……状態のまま**直接明確**にボールを捕えると同時に……

というように、改正というよりは、言ってみれば語の変更、補足といったような部分もかなり見られる。

また、ラグビーではルールというものは、大きく分けて、技術、戦術的なものを規定するものと、ラグビーのような身体と身体で直接触れ合うような競技では、暴力的な行為になり易く、それによる傷害というものを妨止（危険防止）するというものとに分けられる。

そこで、本稿では技術や戦術に影響を及ぼすようなことについての条項をルールの改正ということで取り上げる。

そこで大幅な改正がなされたシーズンを拾って述べるが、そういった改正は、インターナショナル・ラグビー・ボード（国際ラグビー機構）の改正に従ってなされているので、その時期を参考にして、年次を追って述べていく。

昭和三十年

スクラム

① ライン・アウトの際のノット・ストレート、ノット・5ヤードなどによるもの以外を除いて、タッチラインより10ヤードの地点で組む必要はなく、反則のあった地点で組む。タッチ・ライン際での場合は、スクラムの全員がフィールド・オブ・プレイにあるようにする。

② フロント・ローは必ず3人でないと組んではいけない。組まれたあといかなる場合も2列、3列から上って4人以上の形を採ってはならない。

③ 球を入れるプレヤーは遅帯なく、出来るだけ早く入れねばならない。味方のスクラムメンバーが完全に揃うまでぐずぐず待ってはいけない。

④ 球を入れるプレヤーは反動をつけることなく、持っているところから一気に投げ入れること。

⑤ 投げ入れた球が地面に着くところは、一番外側のフロント・ローの二本目の足を越えたところとなった（今迄は一本目）。なお第一番目の足は球がその前を通り越してからでないと動かせない。（今迄は球が手を離れると動かしてよかった。）

ペナルティ・キック

反則のあった地点から、前方5ヤードの半円形を越えれば、何処へキックしてもよい。反則した側は従来通りタッチ・ラインに平行して10ヤード後退していなければならない。今迄はタッチに平行して10ヤード飛ばなければいけなかった。つまり反則側の待っているところへ蹴り込んだのが、真横ぐらいにチョンと蹴っ

て、球を確実に味方に渡すことが出来るようになった。

ライン・アウト

ライン・アウトの外から飛び込んで球をとる場合、相手方はもちろん味方に触れても反則になる。つまり、ほとんど飛び込みを禁止した。

キャリー・バック

キャリー・バックのあとのスクラムはイン・フィールドで最後に球に触れた地点をよぎり、タッチ・ラインに平行な線上、ゴール・ラインより5ヤード前で行なわれる。

ヘルド・イン・ゴール

トライかタッチ・ダウンか見分けのつかない場合のゴール前でのスクラムは、今迄すべて防御側の球であったのが、すべて攻撃側になった。

オフ・サイド

スクラム・サイドでバック・ローがハーフをつぶそうとして、片足でも球の線を越すと反則。また攻めている側のバック・ローがしっかりスクラムを組んでないとスクラム外とみなされ球の位置によっては反則となる。

スクラム・ラインアウトでのオフ・サイド

最初から球より前方の位置に留ったものがすぐに球のラインより後退しなかったとき。球のラインより後方にいるものが片足でも球のラインより出るとき。すぐに戻ったとか、相手を妨害しなかったということは

問題にならない。

以上主なものであるが、夫々を考察してみると、攻撃に有利にしむけられており、プレーから浮き上って何ら関係していなかった条文は実際のプレーに近づけられている。一方反則を厳しくとがめ、消極的な防御戦法を不利に追い込んでいる。より動きの活発なラグビーを期待していると言える。[7]

昭和三十三年

① パスやキックされた球を手の中でファンブルしても地面に落ちたり、他のプレヤーに触れる前に取り直せばノック・オンにならない。ノック・オンの緩和によってゲームの中断を減少させるということである。

② タックル後の球を手ですぐ拾うことが出来るようになった。従来は足で処理した後でなければ手を使えなかった（ピック・アップの反則）。だがタックルされたプレヤーはすぐ球を手ばなさなければならない。しかし起き上がったあとは直接手で球にプレーするとこが出来る。

これによってルーズになる前から球を拾って走れるゲームの進展が速くなった。

③ ルーズ・スクラムの構成がはっきりした。

④ 球を受けた相手方から10ヤード以上離れていてオフ・サイドにあるプレヤーは(A)蹴ったプレヤーが前方の味方を追い越し、(B)各自がキッカーより後に戻るか、(C)敵がキックあるいはパスをし、(D)球を持って5ヤード走るか、(E)球を受けそこなったとき、オン・サイドとなる。

②、③や④より、球を拾って走る場面が多くなり、従ってルーズが少なくなる。これはFW中心のゲームが多くなることを意味する。例えば、ゆさぶりとなった場合など、急速な移動で、防御側でふり残されて攻

撃ライン付近にいたとする。従来は当然オフ・サイドのプレヤーとしてゲームに加わることが出来なかったのが、後方に戻ろうとしつつある時、④の行為のいずれかがなされれば、そのプレーに参加することが出来るようになった。従ってハーフは相手が残っているかどうかの判断も必要になり、パスのくり返しだけでは済まされなくなった。

⑤ ペナルティ・キックの蹴る方向と距離に制限がなくなった。ただキッカーは他のプレヤーが触れるまではそのボールをプレーできない。

⑥ トライ後のプレース・キックはキッカーが自分で球を置いてキックすることが出来るようになった。これでゲーム時間の節約がなされるようになる。

⑦ ライン・アウトでノット・ストレートやノット・5ヤードの場合、スクラムであったが、敵が代って投げ入れるか、スクラムかの選択が出来る。ゴール・ライン際などの場合の戦法がどちらかを選ぶことによって異りを生じる。

以上の主旨をみてみると、むやみな中断をなくしてゲームのスピード化をめざすとともに、連続したプレーの奨励、スピードのあるオープン・プレーの展開ということになるのであろう。[8]

昭和三十九年

① スクラムの際新しくオフサイド・ラインが設けられた。即ち、セット・スクラムの場合、(A)スクラムに参加していないプレヤーはすべて、スクラム内の味方のプレヤーの一番後方の足の線（スクラムオフサイドライン）の後方にいなければならない。またスクラムに参加していないプレヤーが、スクラム内にボールがある

間に、片足でもスクラムオフサイドラインの前方に出したときオフサイドとなる。(B)スクラムの中にボールがある間、各プレヤーは堅くバインドしあってスクラムから離れてはならない。また離れる場合には、オフ・サイドラインの後方にさがらねばならない。(C)ボールを入れる双方のプレヤーが、ボールがスクラム内にある間に、片足でもボールの前方に出すとオフサイドである。

② ライン・アウトのオフサイドライン

ラインアウトに参加しないプレヤーは、ラインオブタッチから10ヤード離れたラインまで、ラインアウト終了迄は退いていなければならない。

③ ペナルティ・キックは自からキックしたボールを自分で受けてプレーしてもよい。ただし一分以内にキックしなければならない。

④ ラインアウトのノット・ストレートやノット・5ヤードにもアドバンテージ・ルールが適用されるようになった。たとえばスロー・インが曲がっても相手に有利になれば試合は続行される。

以上は、いわゆる一九六四年の画期的な大改正といわれるものの、骨子であるが、その狙いはスクラムやラインアウトからボールの動きを速く、出やすくするとともに相手のつぶしプレイを規制してバックスの攻撃に余裕を与えるようにしてオープン化をはかるというものである。[9] 従来、セットスクラムのとき防御側のバックローは獲物を狙う鷹のようにヒールアウトされる球を待っていて、スクラムハーフは例外なくこのバックローのつぶしの餌食になったものである。ボールがスクラムから出ても、団子のようなFWのもみあいになった。この新しいオフサイドラインというものによって、つぶしに行けるただ一人のプレヤー、スクラムハーフにつぶしにこられ

ても、その時には攻撃側は裕々とスリークォーター・パスに移れる体勢になっており、バックスのオープン攻撃、連続プレーが行なえるようになった[10]のである。

昭和四十一年

フリーキック及びペナルティ・キックを除き、自陣25ヤードラインより相手側でキックし、ボールがダイレクトでタッチに出た場合、キックした地点で相手側ボールのセットスクラムになる。

昭和四十三年

① ダイレクト・タッチの場合、四十一年の他に、(A)そのキックを認める（つまりマイナスキックの場合、相手側が有利になる可能性が大きい）、(B)ボールがタッチに出た側で、キックした地点をよぎり、ゴールラインに平行な場所のタッチとする。つまりラインアウトを選べる。の三つのうち一つを選ぶとした。

② モール（ボールが手でもちあげられている密集状態）が定義づけられた。オフサイドは、セットやルースと同じくボールである。

③ スクラムにボールを投入するプレヤーは交代してよい（特別な理由なしにHBの交代を認め、HBの防御が弱いとき、敵ボールに限って破壊力のあるプレヤーが臨時にHBをつとめることが出来る）

ダイレクトタッチについては、タッチへ蹴って逃げるようなブラインドプレイを規制してより一層のオープン化を狙った。従ってフルバックの重要さが著しく増加し、このフルバックに対応する両ウィングの連携プレー、FWのバックアップなど新しい動きかたが出てきた。[11] モールに関しては、前年ニュージーランド選抜が、「モール戦法」で強力なアタックをみせて脚光を浴びた。[12]

昭和四十三年

① ボールをキックした地点、またはその後方より味方のプレヤーがオフサイドプレヤーの前方に走り出たとき、オンサイドとなる。

昭和四十四年

② タッチのボールを内側で受けたときは、そのままプレーしてよい。

③ 地面に横たわったままいずれのプレヤーもボールをもっている相手側をタックルしたり、タックルしようとしてよい。

④ フェヤー・キャッチの際、地上に踵で「マーク」しなくとも、両足で停止してマークと叫ぶだけでよい。

①、②、③はいずれも、代走によるオフサイド解消やタックル後の折り重りの密集をさけて、攻撃側のプレー継続に役立つようになり、[13] ④は得点の機会というものが多くなった。

昭和四十六年

トライ得点が3点より4点になった。

これは国際ゲームなどで、トライをしているチームがPGだけのチームに負けるというような結果が多くなり、勝負に徹して荒っぽくなりペナルティが激増したことに対して、2トライあるいは1ゴールに勝つには3PGをあげなければ勝てないという方式をとったものである。これによってフェアープレーを重視し、クリーンゲームが少しでも増えることも期待され、トライの価値が大きく評価された。[14] 僅少差でのゲームなどのPKを得た場合などの戦術に大きな変化を生じるようになった。

昭和四十八年

① 一回以上のノックオンも、そのボールが地面か他のプレヤーに触れないうちに同一プレヤーが取り直したときはノックオンではない。

② スクラムで、ボールを入れるプレヤー及びその直接の相手は、スクラム内のボールを蹴ってはならない。

③ ラインアウト

(A)長さは5ヤードから15ヤード以内に限る（15ヤードラインが出来る）。(B)最も遠いプレヤーは、その前の味方のプレヤーから適当な距離にならばないときは、ボールが直接このプレヤーに投げられない限り、ライン・アウトに参加していることにならない（ロングラン型投入が出来なくなった）。(C)ラインアウトの終了が従来ボールが地面につき、ラックが形成されたときであったが、ラックまたはモールの中のプレヤーのすべての足がライン・オブ・タッチを越えて移動したときになった（終了が遅くなって、攻撃側に有利）。(D)ラインアウトに並んでいるプレヤーは、ボールに向って飛び上がるか、ピールオフする場合を除き、ボールが地面に着くかプレヤーに触れるかするまでは、味方の隣りのプレヤーと少なくとも1ヤード離れていなければならない。

以上本稿の研究領域内に於いてのルールの改正、変遷を述べてきたが、まとめてみると、昭和三十年代に入って、それ迄の消極ラグビーに対して、あらゆる方面からメスが入れられた。それが三十年、三十三年の大幅な改正である。これが三十年代を通じていろいろと試みられるのである。そして三十九年の大改正、それに続く一連の改正によって、ようやく積極ラグビーへの方向というものが定ってきたといえるのである。だがまだこれから

更に、より積極的なラグビーをめざして進まなければならないのが実状であると言えよう。

(7) 朝日新聞縮刷版、昭和三十年九月三十日
(8) 朝日新聞・毎日新聞縮刷版、昭和三十年九月二十八日　十二版
(9) 大修館書店　スポーツの技術史　昭和四十七年　五三五～五三六頁
(10) ベースボール・マガジン社　日本ラグビー物語　二五三頁
(11) 朝日新聞縮刷版　昭和四十一年九月十五日　十二版
(12) 毎日新聞縮刷版　昭和四十二年九月二十七日　十二版
(13) 大修館書店　スポーツの技術史　五三九頁
(14) 毎日新聞縮刷版　昭和四十六年四月十八日　十三版

四、ルールの改正と得点の推移

ルールの改正と得点の推移については別々に述べてきたのであるが、ここではこの両者の関係がいかにあるかを、ゲームを行なった各チーム（主に関東大学ラグビー）がどういう背景にあったかをも考慮しながら述べてむすびとしたい。

(1) 二十九年度以前、特に二十七年度以前は得点がかなり大きく、その幅も同様であったが（二十六年度以前については推察であるが）、早・慶・明の強豪に対して、他大学もこれから伸びようとした時期であったから、その隔差が現われたものと言えよう。

二十八・二十九年度の得点については、二十七年来日のオックス・フォード大学のプレーによって、ルール解釈にかなりの違いを感じた日本ラグビー協会規則委員会は、インターナショナルの方向に沿って行くことに決め、徐々にではあるがそれに従った改正に乗り出すことになるのであるが、そういったものが反影したものであろう。言はば過渡期であったと言えよう。

(2) 三十年度から四十年度迄は得点が小さく、低迷状態であったと言えるが、この期では三十年度、三十三年度の改正というものの影響が大きかったと言えよう。これらの改正はそれ迄のルールと比較するとかなり大幅な改正で、消極的なラグビーから積極的な、オープンプレーのラグビーというものに狙いはあったのであるが、結果は逆になったと言えよう。それには改正されたルールそのものにも積極ラグビーにならない抜け穴（勝つために利用される）があったであろうが、ラグビー伝統の対抗戦というものから、法大・中大・日大・日体大などの新興勢力の抬頭による一、二部制のリーグ戦形式というものを取るようになり（別図1）、勝敗というものにこだわるようになったという背景が大きいと言える。

(3) 四十一年度からは得点が急増したが、これは三十九年の、いわゆる世界的な大改正というものの現われであると言える。これは従来の、勝敗にこだわるということと、潰ぶしプレイということから、主に新しいオフサイドラインを設けることによって開放されて、より積極的な、オープン攻撃をせざるを得ないし、そうしなければ勝つことも出来なくなったからであるという反影であろう。

更にその後に続く、ダイレクト・キックの改正、代走によるオフサイドの解消、ノック・オンの緩和、モールの定義づけなどの改正によって、（キックで）消極的に逃れることの不利と、積極的プレーの継続ということがよ

り促進されて、四十年代後半からはより高得点になっている。

(4) 三十年代になってから反則数が急増した。それから三十年代は負チームの方が反則が多かったが、三十九年度以降は勝チームの方が多くなっている（勿論、常に反則の少ないチームもあるのではあるか）。そして四十六年度以降はそれがさらに増えている。

このことについては、先ず、ルールの改正によって規制が細く、多くなったということ、ルールの解釈においてそれ迄とは較べものにならない程厳しくなり、レフェリンクも明確になったということてはなかろうか。それから、ラグビーては通常勝つチームは反則が多くないのであるか、一つには勝チームは相手の反則を、アドバンテーシとしてうまく利用している（技術的に上手てあるということてある）ということ、従って負チームの実際の反則はもっとすうっと多いのではなかろうかということである。もう一つには、勝たねばならないということからの、自然発生と意識的発生。後者についてはラクビーてはほとんど考えられぬことではあるが、今後検討していく。従って三十二年度から三十七年度迄のリーク戦形式、それからその後リーグ戦と対抗戦の二クループに分れたという背景が反影しているのではなかろうか。そして最も妥当と思われることは、益々動きの早い、オープンプレイの積極的ラグビーに成りつつあるときに、全てのプレヤーがルールをよく理解していないということ、頭では解っていても、身体で動きとしてわかっていないということ、ではなかろうか。このことは特に外国選手と比較して雲泥の差であると言える。

(5) 四十六年度以降の得点というものは、ペナルティ・ゴールの占める部分が多くなった。これはルール改正の主旨に反してくるが、やってはならないことをやるのもラクビーの本質から大きく外れることであり、オープ

ンプレイ（パス）でトライするという本質と同じく（キックするということは）重要なことである。従ってゲームに勝たねばならないとなればペナルティ・ゴールを狙う（その為にキック力をつける）ということは当然の結果と言えよう。まだまだ外国選手にはとうてい及びはしないものの、日本選手のキック力の向上が伺われると言える。

(6) 負チームの方の得点というものは全期間を通して、それ程の変化を見せない。それに対して勝チームの方は、ルールの改正等を通して大きく伸びている。これはラグビーの本来のあり方を十分理解して、それによる合理的な戦法を実践・努力しているチームが勝利を治めるということであろう。

(7) 前半と後半では、全般的には後半の方が得点が大きい。両チームの差においても後半の方がやや大きいと言える。特にルール改正後はいずれもより増大している。

後半に於いては、前半の堅い動きも取れ、相手の戦法、動きというものに慣れて、実力を発揮出来るため、後半の方が前半で勝っていた側も負けていた側も、より大きい得点を挙げ得、また前半で小得点で競っていたのが後半で大きく差をつけることが出来得、それから前半で負けていたのが後半で大きく逆点して勝ち得るということを示していると言える。また前半と後半では体力的な持続性も考えられる。例えばＦＷの疲労など。要するに一般的には後半で実力は発揮され、勝負は決っせられると言えるのではなかろうか。

(8) 参考として高校レベルの得点についても記載したが、ほぼ同様であったと言えよう。但、ルール改正後、より後年度にずれて反影しているということと、より得点の差異が小さいということであった。

以上近年の日本ラグビーの現状を、得点とルール改正の両面からとらえ、推察することが出来た。これらはあくまでラグビーの本質、おもしろいラグビーに迫るために究明した一部分に過ぎない。推察部分も多々あった

が、それらに関して、御意見・御批判願えれば幸甚に存ずる次第である。